

## 連載「情報処理専門教育について」 の編集にあたって

高橋 延 匡† 中川 正 樹†

情報処理の質と量が大幅に変化している現状において、次代を担う人材の育成は最も重要な問題である。ハードウェアの進歩にともなうコストバランスの変化が、そして、計算機中心から人間中心への設計思想の変革が、確立された分野、新しく台頭しつつある分野のなかで、何を基本と捉え教育すべきか、また、何を削るべきかの選択を難しくしている。

欧米でもこの問題を認識し、ACM、IEEE などで新しい教育の方向が検討されている。著名な学者の寄稿論文、debate もそれぞれの会誌でとりあげられている。

日本でも、情報処理技術者の質と量の大幅な不足が確実であり、文部省は情報処理学会に専門教育のコアカリキュラムの検討を諮問している。また、科学研究費の補助金の下に別の研究班が組織され、多角的側面から検討が進められている。さらに、情報処理学会の全国大会でこの問題がパネルとしてとりあげられた。問題は徐々に明らかになりつつある。これを機会に、教育に関する議論を情報処理学会の会員である3万人の情報処理の専門家と共有することは極めて有意義であると考えられる。なぜなら、多様な意見を多様な状況に照らし合わせることによって、いっそうの洗練と裏付けを得ることができるからである。そして何よりも、我々自身が問題の解決に向けて、いち早く対応することができる。

今号ではまず、1989年1月号のC. ACMに掲載されたthe ACM Task Force on the Core of Computer Scienceの報告“Computing as a Discipline”の和訳と、我が国の文部省が委託した情報処理教育のコアカリキュラム検討委員会の中間報告についての解説を掲載する。

前者は、情報処理専門教育のカリキュラムを構成するための一つの新しい考え方を示している。以後、これはさまざまな形で言及されるので、その和訳の掲載は不可欠と判断した。ただし、この報告を金科玉条として捉えるのではなく、あくまでも議論の対象として掲載する。ACMの委員会のもとの報告書には、

C. ACMには掲載されなかった付録Ⅱがあった。この訳も掲載すべくACMに依頼したが、付録Ⅱはすでにobsolete(鮮度を失っている)とのことで許諾が得られなかった。そこで、その中の重要な考え方を訳者の木村泉先生にコメントとして解説いただいた。このコメントは、ACMの報告書自体をどう読むべきかについても明快にしているので、本文が長いとお考えの読者はこれだけでもまず一読されることをお勧めする。

後者の解説では、計算機科学教育と情報システム教育の必要性が明らかにされる。また、特に日本においては、「情報」という意味のあいまいな捉え方から、本来の計算機科学教育が多くの特設学科でさえ行われていないという問題が議論される。これ以上は、ぜひ本文をお読みいただきたい。

これら二つの解説が、企画が決まって半年足らずで掲載されるのは、それぞれの訳者および著者のご努力と学会誌の新制度のおかげである。

平成2年度末には文部省委託の先の委員会から答申が報告される。それを待って、以下の項目について連載を再開したいと考えている。一年間程になるだろう。

- 計算機科学学科と情報システム学科のコアカリキュラムについて
- 情報処理教育における理論と実験の位置づけ
- 情報処理専門教育とその環境の設計と実現
- 一般情報教育
- 教養課程における情報処理教育
- 専門学校における情報処理教育
- 海外の大学における情報処理教育について
- 情報処理教育と研究
- 究極のプログラミング教育とは
- 企業における新人教育と再教育
- 大学教育への期待と提言

なお、本連載は、大学や企業の教育関係者はもちろんのこと、職業能力の拡大に余念のない技術者、研究者、何を学ぶべきかに興味のある学生会員、そして、望むらくは、すべての会員を対象としている。

なんらかの形で読者の方々のご意見がお寄せいただける方式を考えている。 (平成2年9月4日)

† 東京農工大学工学部電子情報工学科